

パスツールは新治療法に 雌牛からワクチンと名付く

一八八五年七月六日、フランスの生理化学研究所の主任研究者であったルイ・パスツールの元に、ジョゼフ・マイスターという少年がかつぎこまれた。

この少年は二日前に不運にも狂犬に体中を噛まれ、身もだえしていた。このまま放っておいたら、遠からず死んでしまうのは間違いない。少年の両親は、パスツールがワクチンを研究し、動物実験にも成功していることを伝え聞いてやって来たのである。

狂犬病は中枢神経系の重い病気であり、どんな温血動物もこれにかかる。

これをひき起こすウイルスは唾液腺に生存するため、噛みつくことで伝染し、人間にとつては犬による感染率が最も高い。

犬がこの病気にかかると興奮して癡が悪くなり（つまり狂犬になり）、ほんのちょっとしたことで噛みつく。

パスツールは、免疫は与えるが発病はしない程度に弱毒化し、弱めた調整菌を開発することによって狂犬病を治療しようと試みた。この方法はすでに炭疽病で成功していた（一八八一年）。



狂犬病にかかった犬にワクチンを注射して治療することには成功していたし、予防ワクチンとして使用することも可能だった。

だが果たして人間にも有効か、パスツールは悩んだ。しかし放っておけば少年は必ず死じ

る。たとえ万に一つの確率でも助かる見込みがあるのなら、ワクチンを注射すべきだとの結論を得た。注射は成功した。命を救われたマイスター少年は恩を感じ、その後パスツール研究所の門衛として一生を過ごした。

ワクチンという言葉はラテン語のワカ、即ち雌牛が語源となっている。

種痘に使う痘苗に、牛痘にかかった雌牛の皮膚を使つたからという。

パスツールはこの免疫法をワクチン接種と呼んだのである。